# 『花桜折る少将』の語りと引用

## ――物語にみる〈幻想〉――

井上新子

### はじめに

『花桜折る少将』の冒頭は、「月にはかられて」夜深く女の許から帰途についた主人公の点描で幕をあけ、以下彼が昔愛した女の回想、未来の恋人の発見へと続く。三谷邦明氏は、この冒頭表現について、「〈過去〉〈現在〉〈未来〉の〈色好み〉として、この本文（テクスト）では構造的に位置づけられている」と述べ、「後の物語展開に不可欠な布石」と説いた。[1] こうした説明は、様々な引用からなるこの物語の冒頭部分の機能を的確に評したものだと言えよう。ただし、彼との恋愛によって不幸になった、あるいは将来なるであろう女たちが続けて記されたことを、物語全体、特に物語の結末部分との関連において十分に解き明かしたとは言えないのではないか。つまり、〈色好み〉とのみとらえるだけでは、こうした女たちの記述の物語中での意味づけが十全に行われえないのではないかと考える。

本稿では、一編の語りの視点の変容を考慮しつつ、引用の紡ぎ出すものを再検討し、結末部につながる物語冒頭部・中間部の新たな読み[2]を試みてみたい。

### 一　『花桜折る少将』の語り

物語は、夜明けかと見紛う明るい月に騙されて常よりも早く恋人宅を後にした男主人公の描写ではじまる。

月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむところいとほしけれど、たち帰らむも遠きほどなれば、やうやうゆくに、小家などに例おとなふものも聞えず、くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく霞みたり。

（四二五頁）[3]

主格が明示されず、敬語も欠如している。男主人公の心内語といった趣きのある語りである。続く場面。

いま少し、過ぎて見つるところよりも、おもしろく、過ぎがたき心地して、（中略）築地のくづれより、白きものの、いたう咳きつつ出づめり。（中略）「その御方は、ここにもおはしまさず。なにとかいふところになむ住ませたまふ」と聞えつれば、「あはれのことや。尼などにやなりたるらむ」と、うしろめたくて、「かのみつとをにあはじや」など、ほほゑみてのたまふほどに、妻戸をやはらかい放つ音すなり。

（四二五～四二六頁）

前場面と同様、男主人公の視点で物語られている。[4] 彼の視線と語り手のそれとが重なる叙述である。「めり」「なり」等の使用は、読み手が男主人公とともに立ち止まり覗いているような錯覚を起こさせる。ここに到ってはじめて「聞え」「のたまふ」という敬語が使用され、彼を外側からとらえようとする語りに転じる。しかし次の瞬間、また語り手は男主人公の視線と同化してしまう。

をのこども少しやりて、透垣のつらなる群すすきの繁き下に隠れて見れば、（中略）よきほどなる童の、やうだいをかしげなる、いたう姿えすぎて、宿直姿なる、蘇芳にやあらむ、（中略）しばし見れば、（中略）ありつる童はとまるなるべし。（中略）「これぞ主なるらむ」と見ゆるを、よく見れば、（中略）と思ふに、やうやう明くれば、帰りたまひぬ。

（四二六～四二七頁）

彼の視線によって世界が発見されてゆくさまは、「にやあらむ」「べし」という語に端的に表れているだろう。そしてこの場面の最後に、再び男主人公は敬語の使用によって客体化される。[5] 男主人公が桜の屋敷の姫君を発見するまでの冒頭部分は、彼の視線によってとらえられた世界あるいは彼の主観に映じた世界であったことを、その語りが証していると言えよう。

物語中間部は、男主人公の日常が記された部分である。冒頭部分とは打って変わって、彼の行動に終始敬語が使用されている。

日さしあがるほどに起きたまひて、昨夜のところに文書きたまふ。（略）

（四二七頁）

彼を客体化した語りである。以下、和歌や音楽を題材としながら彼を取り巻く人々との関わりを通して、彼の類稀な貴公子ぶりが記される。彼を訪ねてきた「源中将」と「兵衛佐」の発言や、次に引用した琵琶演奏場面、

（前略）御簾巻き上げてながめ出でたまひつる御かたち、いはむかたなく光りみちて、花のにほひも、むげにけおさるる心地ぞする。琵琶を黄鐘調にしらべて、いとのどやかに、をかしく弾きたまふ御手つきなど、「限りなき女も、かくはえあらじ」と見ゆ。

（四二九頁）

がそれである。彼を対象化する語りは、この一連の場面に即応して選び取られたものだと言えよう。

結びの、男主人公が姫君と間違えて老尼君を盗み出す場面では、これまでの場面に比して、より男主人公が突き放した体で記され、また語り手の作中世界への介入の度合いが大きくなっている。語り手は、女童が男主人公を姫君の寝所へ導く決心をした際に、「若き人の思ひやり少なきにや」と感想を漏らし、また、彼の失敗については「その後いかが。をこがましうこそ。御かたちは限りなかりけれど。」と揶揄ともとれる評を吐いている。ただし、男主人公の行動を記す際には、

みつすゑが車にておはしぬ。花は、けしき見ありきて、入れたてまつりつ。火は物の後へ取りやりたれば、ほのかなるに、母屋にいと小さやかにてうち臥したまひつるを、かき抱きて乗せたてまつりたまひて、車を急ぎてやるに、

（四三〇～四三一頁）

以上のように敬語を用いて客体化しているものの、彼の視線に沿った叙述がなされており、そうした語りは彼の失敗を後で種明かしし読み手あるいは聞き手に驚きと笑いをもたらす物語の結構に有効に寄与している。

以上確認した『花桜折る少将』の語りの特性をふまえて、問題の物語冒頭部の引用をみてみよう。

## 二　第一の女

はじめに、物語は男主人公の普段よりも早い恋人宅からの辞去を記した。はやく岡一男氏が指摘した[6]ように、これは、主人公が〈現在の女〉への抱いた無意識の倦怠感の投影だと言える。この〈現在の女〉への熱情の喪失と、続く新しい女との出会いは密接に関わっている。ここで注目したいのが、情景描写「小家などに例おとなふものも聞えず」と「くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく霞みたり」である。

まず、後者からみてみる。これは、『源氏物語』須磨巻の以下の情景との類似がすでに指摘されている。

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭のいと白き庭に、薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。

（二、一五九頁）[7]

須磨への退去を余儀なくされ、左大臣邸の人々と別れを惜しんだ際に、とりわけ召人であった中納言の君と睦まじい語らいをした翌朝の源氏出立の場面である。『源氏物語』が発見した美であり、恋人たちのせつない別れを演出していると言える。避けえない事情によるいとしい者との別離が描かれた『源氏物語』に対して、『花桜折る少将』のそれは愛情の冷めかけた女の許からの朝帰りであった。

次に、前者を検討しよう。諸注に引かれている通り、これは『源氏物語』夕顔巻の「げにいと小家がちに」等の表現に代表される夕顔の宿の描写を意識した表現である。普段耳慣れた「あやしき賤の男の声々」「唐臼の音」「砧の音」[8]等の「例おとなふもの」も、今日は聞こえないのである。これも、共に一夜を過ごした男君と女君の明け方を照らし出す情景である。こうした引用によって、色好みとしての男主人公が造型されてゆく。

ところで、夕顔巻と『花桜折る少将』との間には、この「小家」の情景以外にも共通点がみいだせる。[9]両者とも、男の情熱のやや冷めかけた女の記述からはじまり、男がふと通りかかり魅せられた花が、彼を新しい女との出会いへと導くという骨組みを持つ。夕顔巻冒頭は、

六条わたりの御忍び歩きのころ、内裏よりまかでたまふ中宿に、大弐の乳母のいたくわづらひて、尼になりにけるとぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり。（中略）切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。（中略）さすがにされたる遣り戸口に、黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のをかしげなる、出で来てうち招く。白き扇のいたうこがしたるを、「これに置きてまゐらせよ、枝も情なげなめる花を」とて、取らせたれば、門開けて惟光朝臣出で来たるして奉らす。

（一、二〇九～二一一頁）

と語り起こされる。同巻の後文に、

六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向ひをあはれと思すままに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまを、すこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。

（一、二三七頁）

とあり、光源氏が六条御息所を「いとほしき筋」として認識していたことがわかる。なお、『花桜折る少将』の〈現在の女〉に関する記述にも、「思ふらむところいとほしけれど」とあった。夕顔巻で光源氏は、夕顔の花を介して夕顔の女と知り合い恋に落ちるのであるが、この夕顔の花を扇にのせて手渡した女童の存在もみのがせない。『花桜折る少将』においても、後に詳しく触れるが、扇を手にした女童が登場するのである。また、夕顔巻は、六条御息所邸における「朝顔」を中心とした歌のやりとりの場面が記されるのをはじめとして、六条御息所と夕顔の女とを対比的に描くが、一方『花桜折る少将』も、新しい女発見の後屋敷に帰った男が〈現在の女〉へ「柳」に託した手紙をしたためる場面を添えており、同じく対比的な構図が認められる。[10]

『花桜折る少将』の〈現在の女〉をめぐる記述には、夕顔巻における六条御息所の物語が影を落とす。六条御息所は、光源氏にとって「いとほしき」女、自らの「心の闇」を認識させる女であり、夕

顔の女をとり殺した物怪と関わりがあるかのごとき印象を与える人物、言わば激しく「恨む女」であった。

## 三　第二の女

ひときわ美しい桜に誘われて足をとめた男主人公は、「はやくここに、物言ひし人あり」と、以前通っていた女のことを思い出す。「築地のくづれ」から出て来た「白きもの」に、「ここに住みたまひし人は、いまだおはすや。『山人に物聞えむと言ふ人あり』とものせよ」と尋ねるが、残念なことに彼女はもうここにはいないということであった。「築地のくづれ」は、『伊勢物語』の業平に象徴される色好み的な映像を喚起する。

すでに指摘されているように、この場面は『源氏物語』蓬生巻を想起させる。光源氏は花散里訪問の途路、松にかかる藤の美しさにふと立ち止まり、「見し心地する木立かな、と思すは、はやうこの宮なりけり」と末摘花のことを思い出す。「ここにありし人は、まだやながむらん」と、彼女のことが気掛かりになり訪問した。蓬生巻の場合、末摘花は貧しさにも耐え、ひたすらに源氏のことを待っていた。一方、『花桜折る少将』では、男に忘れ去られた後、女は住み慣れたこの家を去り、ついには恐らく尼となったのであろう。[11] 男の女への処遇が、こういった不幸な結果を導いた要因の一つに違いなく、それは男の「うしろめたくて」という思いに端的に表される。また、現在の邸の荒廃ぶりが、蓬生巻で「いささかの人げもせず」「人住みげもなきものを」、『花桜折る少将』で「人けなきところなれば」と記される。

その後の展開に相違があるものの、『花桜折る少将』の〈過去の女〉は蓬生巻の末摘花、すなわち「待つ女」の面影を宿す女性であった。この末摘花との結びつきは、「山びと」という語にもみいだせる。同じく蓬生巻における末摘花の容貌の描写に、「ただ山人の赤き木の実ひとつを顔に放たぬと見えたまふ」とある。また、この「山びと」は、次の源景明歌のようにも用いられる。

たえて年ごろになりにける女の許にまかりて、雪のふり侍りければ　源景明

三吉野の雪にこもれる山人もふる道とめてねをやなくらん

（『拾遺和歌集』巻第十三・恋三・八四七）[12]

詞書から、ここでの「山人」は男の訪れが途切れ、長い年月がたってしまった女のイメージを彷彿とする。それは、『花桜折る少将』の〈過去の女〉へと通じるイメージでもある。

第二の女は、蓬生巻の末摘花物語や景明歌の影響を受けた、「待つ女（実際は、待ちきれなくなって悲しい運命を辿った女）」であった。

## 四　第三の女

妻戸を静かに開く音を聞き、薄の茂みのもとに身をひそめていた主人公は、女童がやって来るのを発見する。女童は、扇をかざして「月と花とを」と口ずさむ。こうした、桜の下で女が詩歌を詠じ扇を手に男君の方へやって来るという構図は、『源氏物語』花宴巻の朧月夜の君と光源氏の出会いを思い出させる。また、桜の下での垣間見は、同じく『源氏物語』若紫巻の北山における光源氏の紫の上発見の場面とも類似している。いずれにしても、新たな恋のはじまりを予感させる設定である。

さて、女童の詠じた「月と花とを」は、次の源信明歌、

月のおもしろかりける夜、はなを見て　源さねあきら

あたら夜の月と花とをおなじくはあはれしれらん人に見せばや

（『後撰和歌集』巻第三・春下・一〇三）

を引く。美しい月と桜花とを賛美した女童の言だと考えられるが、ここでは信明歌の下の句に着目したい。花は、しばしば女性の比喩として用いられる。『花桜折る少将』において邸に咲き誇っていた満開の桜は、そこに暮らす女主人である姫君と相似的関係にある。「花桜折る」という題名自体、そのことを暗示している。この喩えの世界を念頭におくと、下の句「あはれしれらん人に見せばや」はたんなる自然の賛美以上の意味を帯びてくる。同じ信明歌を引いた文章が『源氏物語』明石巻にあることはよく知られている。

忍びてよろしき日みて、母君のとかく思ひわづらふを聞きいれず、弟子どもなどにだに知らせず、心ひとつに立ちゐ、輝くばかりしつらひて、十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。君はすきのさまやと思せど、御直衣奉りひきつくろひて夜ふかして出でたまふ。

（二、二四四頁）

明石の入道が娘を光源氏に逢わせたい意をほのめかすために、この歌が引かれた。「あたら夜の」は、恋の誘いの語として機能している。『花桜折る少将』における信明歌の引用もまた、この明石巻の例と同様の機能を持つと考えられないだろうか。むろん、女童はこの時すぐ近くに男が隠れていることなど知る由もなかった。したがって、彼を認め意識的に誘う言をくちずさんだわけではない。むしろ、彼女の言葉に無意識の誘惑の要素があり、この場面そのものに男主人公を屋敷の姫君の許へいざなう雰囲気がたゆたっていると考えるのである。また、先に指摘したこの場面と夕顔巻冒頭とのイメージの重なりあいからも、「誘惑性」が認められるのではなかろうか。

この女童は、物語後半部でも、男主人公を姫君の許へ手引きする役割を担っている。彼女と男主人公へ仕える光季とが恋仲であったことから、彼女は姫君への手引きを引き受け、主人公を導いた。冒頭の「誘惑性」から実際の手引きへ、この女童の活躍があればこそ

主人公の姫君略奪が実現しようとしたのである。

第三の女、〈未来の女〉の周辺は、こうした「誘惑性」を帯びた世界であった。

ところで、第三の女は男主人公の〈未来の女〉であり、第一・第二・第三の女たちの生は、女の運命を連続的に体現したものだと言える。可憐な魅力で男主人公を魅了する〈未来の女〉のその後が、彼の意識の深層でそろそろ飽きられつつある〈現在の女〉の姿であり、彼に捨て去られついには尼となった〈過去の女〉の姿なのである。このことは、〈未来の女〉の周辺が「誘惑性」を備えることと相俟って、男主人公の失敗に物語の深層において大きな影を落とすだろう。

## 五　女たちのしっぺ返し

女童の活躍をたどると、普段は女たちを手玉にとる側の人間であるはずの男主人公が、逆に彼女に手玉にとられているという印象を受ける。彼は、ふと足をとめた桜の邸の姫君に魅せられ、運命に翻弄されるように、姫君ならぬ老尼略奪という失敗へと突っ走ったのである。彼が何か抗しがたい力に引き込まれていく様は、物語中の「月にはかられて」「過ぎがたき心地して」「そなたへとゆきもやられず」「たびだたれつつ」[13]等の表現に端的に表れているだろう。

こうして導かれた彼の失敗の意味を考える時、先にも触れたように、〈未来の女〉につながっていく〈現在の女〉そして〈過去の女〉の存在は意外に大きな影を落とすのではなかろうか。〈未来の女〉の周辺は、男を手玉にとる「誘惑性」を帯びた世界だと先に述べたが、それと連続する趣きを持つ〈現在の女〉・〈過去の女〉は、『源氏物語』等の引用によって、男に飽きられ、そして忘れ去られた、「恨む女」・「待つ女」として造型されており、彼女たちは男に「いとほし」・「うしろめたし」という後ろ暗い思いを抱かせる存在としてあった。彼の失敗は、物語の深層において、こうした女たちの鬱積し凝り固まった恨みの力が生んだものだとも言えるのではなかろうか。つまり彼は、これまで不実を重ねてきた女たちからしっぺ返しを受けたのである。[14]それは、男の「いとほし」「うしろめたし」という女たちへの後ろ暗い思いがみせた幻影だとも言えよう。冒頭において、第一・第二・第三の女たちが連続して記されるのは、こうした実際は記されない恨みを抱いた女たちのしっぺ返しを、物語の背後に幻視させるためだったのではないかと思う。

さらにこの幻影は、物語冒頭に夕顔巻の影がみられるということにより、一層くっきりと浮かび上がってくるのではなかろうか。先に、〈現在の女〉に六条御息所、〈未来の女〉に夕顔の女の面影をみたが、夕顔物語のいきつく先が、物怪による夕顔の女の死であったことは重要である。物怪は後ろ暗い気持ちを抱いていた光源氏の心がみたもの、という解釈も成り立つ。この物怪は廃屋のそれであっ

て直接六条御息所と関わるものではないようだが、源氏の「心の闇」を考慮すると、夕顔巻冒頭に記され、この巻で度々夕顔の女と比較されるかたちで登場する彼女は、イメージとして物怪への関与を否定できない存在でもあった。『花桜折る少将』の物語は、そうした深刻な女の情念の世界を呼び起こす可能性を秘めているのである。が、姫君略奪の決着は人違えという男主人公の失敗に帰する。間違えられたのが、年老いた、しかも女としての生から退いた尼君であったというのは、二重の皮肉である。そこには笑いや滑稽味が漂うわけで、結末は女たちの心の暗黒に厳しく向き合うものとはなっていない。これは、女たちに不実をはたらいてきた好色者の男に対する罰として、物語を享受する女たちにとって小気味いいものであったろう。

こうした結構と先に確認したこの物語の語りとは、密接な関連を持つ。男君の主観の色濃い語りによって紡ぎ出される冒頭部は、現在また過去に関わった女たちへと思いが馳せられるとともに新しい女を発見する場でもあった。引用は彼を色好みとして描き出すが、一方で彼の女たちへの後ろ暗い思いを映し出してもいる。彼を客観的に貴公子として定位する物語中間部を経て、結びの部分では彼を突き放したかたちの語りで取り違えの失敗が記される。このような語りの変容を思うと、冒頭部分の男君の主観を全面に押し出した語りによって描き出された世界は、実像というよりも、彼の心がみたもの、といった様相すら呈してくる。そこに、後ろ暗い思いと新しい女の発見が語られたことは、そうした想念や存在の実体としてのあやしさを示唆しているのではないか。それらはみな幻影かもしれないのである。

## 六　〈まやかし〉の時空間

物語の深層において、女たちのしっぺ返しという側面を持つ男主人公の失敗を成立させた世界について、次に述べてみたい。そもそも、彼が迷い込んだのは、〈まやかし〉の時空間だったのではなかろうか。

冒頭の、夜明けかと見紛うほどの「くまなき月」。これは、朧月夜が自慢の春の季節にどこかそぐわない。この点について、安藤亨子氏は、

> 月、それも騙されてしまうほどの明るい月、それは伝統的な和歌の世界では秋のものであったはずである。けれど、文を辿ると「花の木」や「霞み」ということばに出逢って、季節が春だったのだと知るのである。初め予測していたものが一文の終結部分に至ってひっくり返されるというしかけは、この物語展開そのものにもかかわっていそうで、そうした面でもこの冒頭文は注意しておきたい部分である。

と述べ、さらにいくつかの例を引いたのちに、『花桜折る少将』を

「題名の華麗さを裏切った、言い換えると、読者（享受者）を謀った、おもしろおかしい物語」と位置づけた。[15] 問題の「くまなき月」は、確かに予測への裏切りという側面を持つが、加えて、主人公の立つ場の異質性の醸成に一役買っているのではなかろうか。春と秋の時の交錯。そこには、時の「いたづら」がみえかくれし、いわば「時にはかられた」少将がたたずんでいる。彼は、現実世界とは異なる世界へ足を踏み入れようとしているのである。

同様の語として、「群すすき」をあげたい。これは、桜の咲き誇る〈未来の女〉の邸の描写中に見える。春の季節と、秋を代表する植物「群すすき」との不調和。ただし、『源氏物語』柏木巻に、

四月ばかりの空は、そこはかとなう心地よげに、一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、もの思ふ宿は、よろづの事につけて静かに心細く暮らしかねたまふに、例の、渡りたまへり。（中略）前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一叢薄も頼もしげにひろごりて、虫の音添はん秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けくて、分け入りたまふ。

（四、三二六頁）

とある記述から、「薄」は本来の季節である秋以外にも現在の荒廃を伝えるために登場することが確認できる。この文脈で理解する先学に従うのが妥当だが、それにしても、満開の桜と「群すすき」との取り合わせが、違和感を抱かせるのもみすごせない。

主人公が踏み込んだ未知の時空間の異質性にこだわってみたが、こうした表現の持つ志向性と関わってくるのが、「白きもの」であろう。これは、主人公に昔愛した女の不在を告げる人物を指し示す際に用いられた語である。「もの」という曖昧さを残す表現のために、「白きもの」の実態は判然としない。例えば、『源氏物語』手習巻では、出奔し木陰に臥していた浮舟が彼女の発見者である僧の眼を通して、「白き物」ととらえられている。

この初瀬に添ひたりし阿闍梨と、同じやうなる、何ごとのあるにか、つきづきしきほどの下臈法師に灯点させて、人も寄らぬ背後の方に行きたり。森かと見ゆる木の下を、うとましげのわたりや、と見入れたるに、白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と、立ちとまりて、灯を明くなして見れば、もののゐたる姿なり。

（六、二六九頁）

ここでのそれは、「もの」の存在そのものの持つ得体の知れなさ、そこから生ずる不気味さ、不思議さというものを内在していると言え、観察者自らの認識外の存在へ抱いた懐疑の念、あやしみの感情を伝えている。『花桜折る少将』の「白きもの」も同様の文脈の語であり、観察者である男主人公の異質な対象への不可思議感を表しているのであろう。そこには、彼を迎える世界の異質性が、顔を覗かせているのである。

ところで、先にこの「白きもの」の実態は判然としないと述べたが、現在、白い装束を着た人物であるとして、男、老人、老女、女童等の解釈がなされている。[16] ここではまず、この人物の属性として記される「いたう咳きつつ」に注目したい。例えば、『源氏物語』手習巻の、浮舟が老尼君に怯えるさまを描写した場面に、以下のような記述がある。

夜半ばかりにやなりぬらん、と思ふほどに、尼君咳おぼほれて起きにたり。灯影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、（略）　（六、三一八頁）

蓬生巻にも、

わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて声づくれば、いとも古りたる声にて、まづ咳を先にたてて、「かれは誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。（中略）声いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。　（二、三三六頁）

という記述がある。こうした例から、「咳」には、老いた人の常にするもの、というイメージがあったことがわかる。さらに、手習巻の方でもう一つ問題にしたいのが、老尼君の外見の記述、「頭つきはいと白きに」である。老人描写の際の典型として「咳」「白髪」をみるなら、一般に白装束の意に解されている『花桜折る少将』の「白き」には、同時に老いた人[17]の白髪のイメージをも重ねられていると考えられないだろうか。

また、物語世界に謎をもたらし不思議な雰囲気を醸し出すのが、「みつとを」「すゑみつ」「みつすゑ」という登場人物名である。稲賀敬二氏によって、これらの名前の背後関係について一つの興味ある仮説が提出されている。[18] そうした想像を喚起するものが作中にちりばめられていることは、確認してきた主人公を迎える〈まやかし〉の時空間の性質と、根のところでつながっているのではなかろうか。それは、ミステリー性とでも言えるものであろう。

## 七　象徴としての桜

前節で確認したように、男主人公のさまよい出た〈まやかし〉の時空間は、彼の彷徨から失敗へと続く、現実とは懸け離れたもう一つの時間を創り出す上で有効に機能していると言えるが、さらに、この物語では題名にも登場する「桜」が象徴的な存在となっていることを述べてみたい。

まず、冒頭の満開の桜。主人公を誘い、過去に愛した女を思い出させ、未来の恋人の垣間見へと導く。桜花は、〈過去の女〉の象徴であり、同時に〈未来の女〉のそれでもあった。

夜歩きから帰って来た主人公の日常生活、つまり昼の時間が記される物語中間部では、散る桜が描写される。

友人の源中将と兵衛佐が、彼を訪ねる。「花の木どもの咲きみだれたる、いと多く散る」を眺めて交わされた連歌の前句、「あかで

散る花見る折はひたみちに」には、十分に堪能せぬ間に足早に散りゆく桜をひたすらに惜しむ心持ちが表出された。対する付句は、「わが身にかつはよわりにしかな」。「かつは」を「かへば」「かへて」へ、「よわりにしかな」を「かはりにしがな」へとあらためる説もあって興味深いが、ここではもとのかたちである「かつはよわりにしかな」でとっておく。無常に散りゆく桜花に自らの身の衰えを感じた、という意であろう。桜の散るさまと人間の身の儚さとが、オーバーラップする仕組みになっている。このやりとりをうけて詠じられた歌が、「散る花を惜みとめても君なくは誰にか見せむ宿の桜を」。――散りゆく桜花を惜しみ仮にとどめえたとしても、肝心のあなたがこの世にいらっしゃらなかったら、果たしてこの花を誰に見せましょうか。桜花と人間存在双方の無常が、強調された歌である。この場面では、散りゆく桜から顕現した無常への思い、さらに言えば衰え・老いへの意識が記された。

続く場面でも、落花が背景としてある。夕方、主人公は父の邸を訪ねた。彼は、「花のいとおもしろく散りみだるる夕ばえ」を眼前にし、琵琶を奏す。その姿は、この上なく素晴らしい。美を誇るという側面は共通するものの、前場面の落花が衰えや老いを喚起し無常を体現するものであったのに対し、こちらのそれは美そのものに重点がおかれた描写であり、主人公の美麗さを一層引き立てるものとして機能している。両者は、無常を実感させるもの及び美の王者という、桜の持つ二面性を引き出し活用したものであろう。

物語にちりばめられた桜は、華やぎと一方では衰えを伝える。姫君略奪譚の本筋に直接関わりがないと考えられる物語中間部に、それらのイメージが配されていることは重要だろう。両義の桜は、結末の、若い姫君から老いた尼君への取り違えをシンボライズしているのではないか。言い換えれば、物語に記された桜の両義性は、「若さ」と「老い」とが対極のものではあるものの、決して無関係なものではなく、人がこの世に生きる限りわかちがたくつながっていることを物語っているのではなかろうか。題名の「花桜折る」と、物語にちりばめられた両義の桜と、結末の取り違えは、互いにイメージが響き合うよう創られているのである。

このように、桜花は、女たちの連続性を象徴するものでもあり、また、「若さ」と「老い」の、言わば、かけはしでもあったと言うことができよう。

## おわりに

以上、主に『花桜折る少将』の語りと引用とを通して、物語世界の解明を試みた。結末の若い姫君から老いた尼君への取り違えは、物語の深層において、男主人公がこれまで関わり不幸にしてきた女たちからのしっぺ返しという側面を持ち、そうした趣向と、彼の彷徨する世界として形成された〈まやかし〉の時空間や、謎めいた設

定、物語にちりばめられた両義の桜とが密接な関わりを持つことを述べた。

これらのことが『花桜折る少将』を〈幻想〉の世界に仕立てあげていると言えるのではなかろうか。言わば、ミステリー性の色濃い物語として、この短編物語を位置づけたい。

ところで、この作品には、「若さ」と「老い」の対比の構造が認められた。しかもこの対照は、「取り違え」や桜花の象徴により、物語の中で互いに無関係な存在ではないようにしくまれている。このように、ある対照が存し、それらが無関係ではないしくみが備わっているのは、この『花桜折る少将』だけでなく、堤中納言物語中の他作品にも幾編かみられることを別稿で指摘した。[19] 長編物語と異なり、断面から物語をかたちづくる短編物語においては、対照的な「典型」をとりあげ、そこに接点を設けることは、物語世界を立体的に構築する上で有効に機能するだろう。こうした短編物語の方法という観点からも、今後さらに各作品を検討していきたい。また、こういった現象は、堤中納言物語の編者の世界認識の問題ともあるいは関わってくる可能性があるだろう。考えてみたい課題である。

〔注〕

(1) 三谷邦明氏「堤中納言物語の方法――〈短篇性〉あるいは〈前本文〉（プレテクスト）の解体化――」（『物語文学の方法Ⅱ』（有精堂、一九八九年）所収）

(2) 例えば、安藤亨子氏は「花桜をる中将物語」（『体系物語文学史』第三巻（有精堂、一九八三年）所収）において、物語全体を、「笑いそのものより、笑いへの動機づけといった意味あいが強い」部分、「ことばそのものによる表現上からの笑い」の部分、「主人公の行動そのものに対する笑いへと漸層的に笑いをもりあげてゆく」部分の三部から成るとし、本編の、「笑い」の物語としての側面を強調した。また、鳥居明雄氏は「王朝末期の奇談――「花桜折る少将」――」（「日本文学」一九八九年二月）において、本作品を〈時間〉の物語として位置づけ、「王権世界としての昼の時間」「色好みとしての夜の世界」「「月にはかられ」た第三の時間」の存在を指摘した。結末の主人公の失敗を、「幻影の時間軸が破られ」たとし、物語を「王権への侵犯そのものが空洞化されている事態の表出として成立している」と位置づけた。

(3) 小学館日本古典文学全集。以下、『花桜折る少将』の引用は同書に拠る。

(4) 塚原鉄雄氏（新潮日本古典集成『堤中納言物語』、一九八三年）や三谷邦明氏（注（1）に掲げた論文）が、すでに指摘している。

(5) 注（4）の塚原氏著書にも、指摘がある。

(6) 岡一男氏「堤中納言物語とその心理分析」（日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅲ』（有精堂、一九七九年）所収。なお初出は、文林堂双魚房刊『古典と作家』（一九四三年）。）

(7) 小学館日本古典文学全集。以下、『源氏物語』の引用は同書に拠る。

(8) いずれも夕顔の宿の早朝を彩る音である。

(9) 一般には、この箇所の夕顔巻からの影響は、表現レベルの個別的な事例にとどまる程度のものだと考えられている。本稿では、この場面全体に夕顔巻の面影が霧のようにおおいかぶさっているのではないかということを検討した。次の項で論じる蓬生巻の例も、同様である。

(10) ここに掲げたいくつかの点は、それら一つ一つでは些細なことであり、また二つの間に特徴的なことでもないので、ことさらに両者の関連を論じる必要もないだろう。しかし、その個々がまとまって指摘できることには、やはり注意を払うべきではないだろうか。

(11) こうした『源氏物語』との対比の妙については、三谷栄一氏『鑑賞日本古典文学　堤中納言物語』（角川書店、一九七六年）にも指摘がある。

(12) 新編国歌大観。以下、和歌の引用は同書に拠る。

(13) 「たちよられつつ」という本もある。「たびだたれつつ」の方が、日常とは異なる世界へ足を踏み入れていくさまが強調されるだろう。

(14) 岡一男氏は、注（6）に掲げた論文でこの失敗を、「浮気な少将はかくて見事に天罰をうけてしまった」としている。

(15) 注（2）の安藤氏論文。

(16) 「男」と解しているのは、寺本直彦氏（岩波日本古典文学大系『堤中納言物語』、一九五七年）、松尾聰氏（『堤中納言物語全釈』、笠間書院、一九七一年）他。「老人」は、三角洋一氏（講談社学術文庫『堤中納言物語全訳注』、一九八一年）、塚原鉄雄氏（新潮日本古典集成『堤中納言物語』一九八三年）、池田利夫氏（対訳古典シリーズ『堤中納言物語』、旺文社、一九八八年）、大槻修氏（岩波新日本古典文学大系『堤中納言物語』、一九九二年）他。「老女」は、稲賀敬二氏（小学館日本古典文学全集『堤中納言物語』解説、一九七二年）他。「女童」は、山岸徳平氏（角川文庫『堤中納言物語』、一九六三年）、三谷栄一氏（前掲書）他。

(17) 「老人」とみるが、性別については決めかねている。

(18) 注（16）に掲げた稲賀氏解説。「光遠」は男主人公が彼の家司で親しい「光季」の名の一部を借用してとっさに口にした名前、「季光」は「光季」の変名とする。

(19) 拙稿「堤中納言物語『このついで』の方法――部分映像の交錯、重層化による美的世界の創出――」（「国語国文　研究と教育」第二八号、一九九三年一一月）、「「人に『すみつく』かほのけしきは」――平中の妻と『はいずみ』の女――」（「国文学攷」第一四二号、一九九四年四月）、「『逢坂越えぬ権中納言』題名考――「安積の沼」と「淀野」をめぐって――」（「古代中世国文学」第七号、一九九五年八月）

[付記] 本稿を成すにあたり、位藤邦生先生、妹尾好信先生には御多忙の折りにもかかわらず、終始暖かい御指導を賜った。記して御礼申し上げる。また、本稿は、平成七年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果である。

――いのうえ・しんこ、日本学術振興会特別研究員――